

ワーキンググループを核とした組織的な英語授業改善の取り組み — 国際教養科における4技能統合型授業づくりに向けて —

学籍番号 179959

氏名 森下 信明

主指導教員 福永 光伸

1. 研究の目的と枠組み

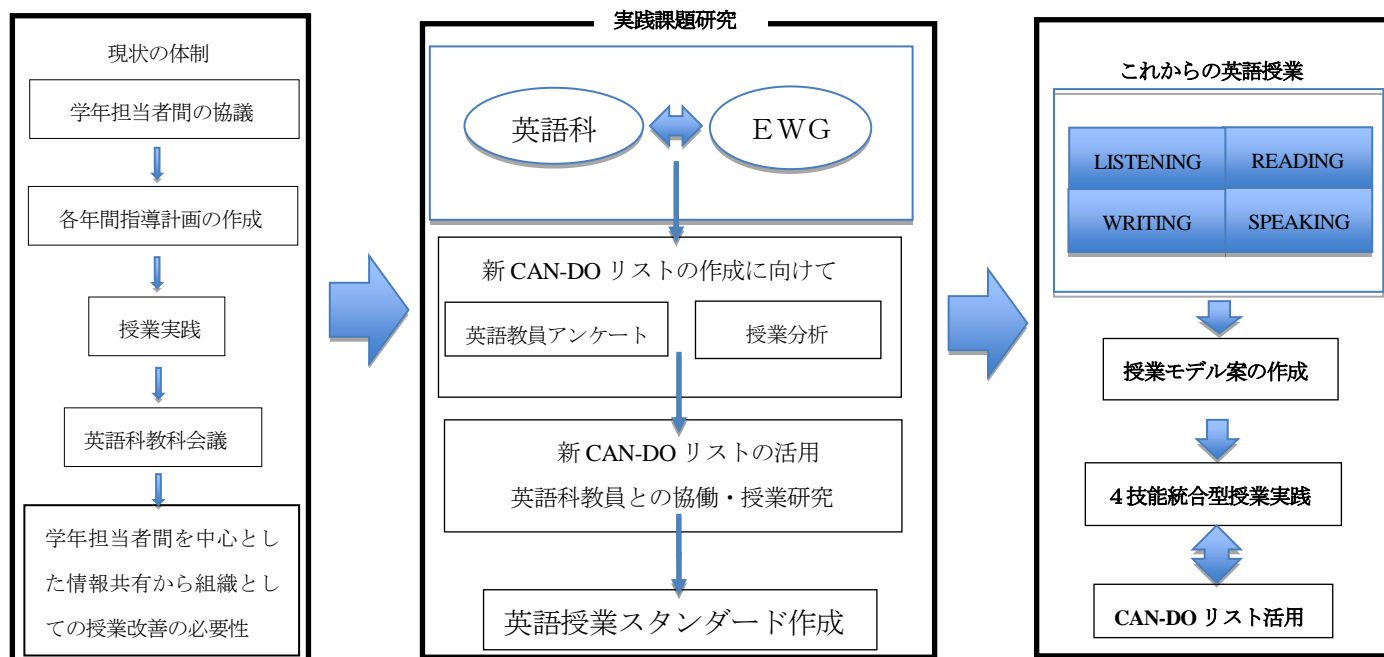
グローバル化社会において、実践的な英語運用能力が必要とされ、ますます発信型の英語力が必須となる。高等学校の授業では、これまで以上に言語活動が高度化され、英語における4技能（5領域）統合型の指導が必要となる。2020年度、現在の大学入試センターに代わり「大学入学共通テスト」が実施される。これまでの2技能（聞くこと・読むこと）中心の試験から、4技能（聞くこと・話すこと・読むこと・書くこと）すべてを均等に評価する試験に変わるなど、大きな入試改革が迫っている。また学習指導要領においては、これまでも4技能のバランスの取れた指導が求められてきたにもかかわらず、「読むこと」が中心で「聞くこと」と「書くこと」の指導内容は少なく、発音練習はあっても、自分の意思を伝える「話すこと」の取り組みは非常に少ない現状である。

実習校（大阪府立花園高等学校）は、普通科と国際教養科を併設する高等学校である。主要な言語である英語は、大阪府の「使える英語プロジェクト事業」として指定される等、これまで先進的な授業を展開してきた。しかしながら、科目によっては4技能の中の特定の技能に偏っているなど、「書くこと」や「話すこと」である発信力に課題があった。この課題を解決するため、具体的な実践として、

(1) 組織として課題を解決する英語ワーキンググループ（EWG）を発足し、4技能統合型英語授業の在り方の研究

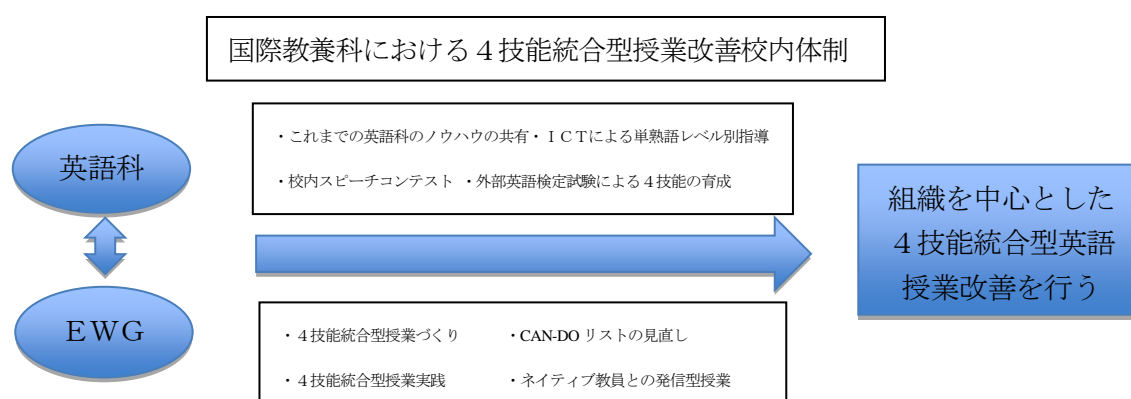
(2) 国際教養科で求められる英語授業モデルの研究

の2点に取り組むことにした。以下がその枠組みである。



2. 実践の概要

この研究を進めるために、実習校ではコーディネーターの役割を担いながら、英語ワーキンググループ（EWG）を核に取り組みることになった。これまで実習校のCAN-DOリストは、英語検定を参考に作成したものであるが、表現があいまいであり、具体的な記述に欠けていた。そこで自然なコミュニケーションを重視した語学力の国際標準指標であるCEFRを参考に、新CAN-DOリストを作成した。新CAN-DOリストの活用により、4技能統合型授業に向けた授業改善に組織として取り組んだ。次に実習校のこれまでの英語授業を4技能の観点から改めて検証し、公開授業を取り入れ、授業モデルの検討を行った。それらを踏まえ、新たな国際教養科に向けた英語科における英語授業スタンダードを提示することにより、時代の流れに即した英語授業の確立を組織としてめざした。



3. 成果と課題

2年間の実践課題研究の成果として5点をあげる。

1点目は、実習校では、授業研究を組織として改善する体制がなかったが、英語ワーキンググループを核とし、4技能統合型授業づくりに向けて、定期的に会議を持ちながら授業改善に取り組んだことである。

2点目は4技能統合型授業づくりに向けて、英語教員授業アンケートを英語ワーキンググループで作成し、「育てるべき生徒像」、「達成すべき英語力」を分析することができた。その結果を英語科と協働しながら、新CAN-DOリストを作成できたことである。

3点目は新CAN-DOリストを活用してレッスンごとに各単元のCAN-DOリストに落としこみ、4技能統合型授業づくりに向けて学年単位で取り組んだことである。

4点目はネイティブ教員との協働により、これまで行ってきたチームティーチング授業を、4技能統合型授業の観点から見直し、公開授業を実施できたことである。

5点目は英語ワーキンググループを核とし、4技能統合型授業モデルを検討した成果を活かして、英語授業スタンダード作成の基礎を作ったことである。

課題としては、授業改善の一助として作成した英語授業スタンダードを、英語ワーキンググループにおいて内容を改善しながら、英語科と協働し、より良いものへ作り上げていくことである。

2年間の実践課題研究において、4技能統合型授業づくりに向けて、組織として取り組むことができた。今後、英語ワーキンググループを中心に、英語科と連携・協働しながら、時代に即した英語授業のあり方について改善の取り組みを継続させていく。